

花はぱちりと目を開けた。

朝だ。

窓からの光の射し込み具合と空気の冷たさから察するに、まだ早朝。もう一眠りしても良いぐらいだろう。

けれど、花は起きることにした。せつかくの手つかずの朝なのだから。

外は気持ちよく晴れているらしく、光は白くきりりと新鮮。冬の寒さをもとせずに、小鳥たちがさえずっている。こんな気持ちの良い朝にせつかく目覚めたのに、寝てしまつてはもつたいない。

花は寝台から出て、身支度を整えた。冬の寒さが肌を刺すが、かえつてその空気の冷たさが心地良く感じる。

朝ご飯の時間にはまだ早いだろう。

せつかく目を覚ましたのだし、散歩でもしようかと外へ顔を出した。

空は白み、宵の欠片は空に残された白い月とかすかに残されたわずかな数の星だけ。

周囲はやはりまだ静かだ。

廊下を歩き出すと、見張りの兵士——恐らく夜番で、まだ交代していないのだらう——がやや疲れた顔で「おはようございます」と声をかけてくれた。

「おはようございます。お疲れさまです」

花も返すと、彼は首を傾げつつ花に訊ねた。

「今日は朝早くから何かあるのですか？ 先ほど孔明様も通つていかれましたが」

「師匠が？」

「はい」

花も首を傾げた。何だろう。今日の朝はいつも通りの時間に朝議があるだけで、特別早起きをしなければならぬ案件はないはずだ。

いやむしろ。

花は眉を寄せた。

あの孔明のことだ。徹夜で今まで仕事をしていて、今から寝るのかもしれない。十分に有り得る。

昨日はそれほど急ぎの仕事はなかったはずだが、花が下がった後で駆け込みの仕事が増えたのだろうか。

花は兵士と別れ、孔明の執務室を目指した。

つい先程この辺りを歩いていたのなら、私室へ戻ったのではなく、きつといつの間にか出来てしまった執務室内の仮眠スペースにいることだろう。

行つて花に何が出来たわけでもないけれど、朝議の時間ギリギリまで寝かせておいてあげることぐらいは出来るだらう。

回廊の角を曲がると、庭先に見慣れた白い衣が見えた。

どうやら追いついたらしい。

「師匠、おはようございます」